

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-17

男が『朝妻船』の配色と画面構成を、ほぼ正確に覚えていた引き出しの多さと自分が役立てたことの嬉しさに加え、即座に絵画二点の内の一点をブラッシュアップした神がかり的な事象に、女は異次元を体感していた。

画家の眼差しに戻った横田は、真紀の裸体のデッサンが描かれた画帳を広げて着想の糸口をつかもうと思いを巡らしていた。

「……薄絹の長襦袢を着たらどうだろう？」

横田はその角張った顔立ちに不釣り合いな笑みを浮かべて訊いた。

真紀は画家が真剣に向き合ってくれている姿勢に、少しでも応えたいと思った。

「優美でエロティックですね。長襦袢なら友禅などはいかがでしょう？」と踏み込んだ提案をした。

「……それ、いいじゃないか！」と画家は前のめりになって首肯した。

「お店の近くに専門店がありますので、よろしければ京友禅と加賀友禅を何点か借りてまいります」

「そんな店があるなら、一緒に行ったほうが話は早いんじゃないの」

「世間の目がありますので、私にお任せください。かさばる物でもないですから」

「わかった、お任せしよう。墨で描くから、色合いはこだわらないのだが、淡い藍色があったら、それもお願いしたい」

「承知しました。藍色は『朝妻船』にも効果的に使われていましたね」と真紀は調子に乗って言ってしまった。すぐに気づいて、怨めし気に横田を見ると、太い首を縦に振ってニヤついていた。

ひとまず、その後の制作過程のあれこれは端折るが、かような次第で、越前和紙に描かれた真紀の裸婦像は、横田画伯の一つの佳作『着衣のママ』として完成された。

彩色画については、横田が画道で敬愛する師と仰ぐスペイン画家フランシスコ・デ・ゴヤ作の『裸のマハ』を指標として、越前和紙に天然岩絵の具を使い、こちらは長襦袢を脱がせた作品2『裸のママ』として完成した。

二作の制作日数は、何点かの受注作品をこなしながら、延べ半年にわたった。

日本画寸法は、横田のゴヤへの異常なまでの固着もあって、手漉き和紙の職人技に頼るところが大きかったが、『裸のマハ』と同じサイズ97cm × 190cmとした。